

令和7年度 学長表彰受賞者

2025 President's Commendation

◎学業部門/Academic Category

イマイ ショウタ
今井 翔太

大学院新学術創成研究科 博士後期課程 ナノ生命科学専攻

エクソソーム表面に制御性T細胞 (Treg) の分化に必要な抗原提示分子であるpMHCIIとIL-2, TGF- β を提示し, 生体内で抗原特異的Tregを誘導する新規免疫制御プラットフォームの構築に成功した。これは自己免疫疾患やアレルギー疾患に対し, 従来の全身免疫抑制に依存しない治療戦略を提示するものであり, 基礎・応用両面で価値の高い成果として, 国際的にも高く評価された。

ミズノ コウスケ
水野 皓介

大学院新学術創成研究科 博士後期課程 ナノ生命科学専攻

細胞間相互作用を人工的に設計し, 細胞集団のふるまいを構成的に再現することで, 多細胞パターン形成原理の理解を目指す研究を行った。とりわけ, 分泌因子と細胞接着の協調によるパターン形成機構の解明は, 高い独創性と卓越した実験技術に裏打ちされた成果であり, 国内外において高い評価を受けた。

キマタ カイ
木俣 海

大学院自然科学研究科 博士前期課程 生命理工学専攻

ゲノム編集におけるCRISPR/Cas9のオフターゲット効果を予測する手法の改善案として, Googleが開発した大規模言語モデルであるBERTにDNA配列を学習させたDNABERTと, ヒストンのメチル化・アセチル化及びATAC-seqなどのエピジェネティックな特徴を統合することで, 従来法を上回る予測精度を達成した。その成果は, 国内外で高く評価された。

プトリ カリスマ スリヤ
PUTRI KHARISMA SURYA

大学院自然科学研究科 博士後期課程 数物科学専攻

空間的に鋭いスパイク構造が発生・伝播する現象を高精度に捉えるため, ラグランジュ・ガレルキン型移動メッシュ法という新しい数値手法を提案し, その厳密な数値解析を行った。特に移流拡散問題に対して, 空間次元の場合とはいえ, メッシュ頂点の移動に伴う要素の重なりを防ぐための理論的条件を導出するとともに, 数値解に対する最良誤差評価を確立することに成功した。その成果は, 移動メッシュ法の理論的基盤を大きく前進させるものであり, 手法の独創性と解析の完成度の高さの両面において極めて優れており, 国内外において高く評価された。

タカハシ リオ
高橋 里緒

大学院医薬保健学総合研究科 博士前期課程 保健学専攻

IFN- γ による選択的造血抑制とHLA欠失造血幹細胞クローンの増殖優位性を解明し, 免疫学的攻撃に依存した病態進展メカニズムを明確に示した。この研究は希少疾患医療とiPS医療の基盤となり得る知見を提供し, 疾患発症機序の理解から診断法開発, 将来的な創薬研究へと展開し得る高い波及性を有しており, 国内外において高く評価された。

スギヤマ ハルカ
杉山 遥香

大学院医薬保健学総合研究科 博士前期課程 保健学専攻

プロテインホスファターゼの基質特異性を制御する「アダプタータンパク」を同定するとともに, 異なるアダプタータンパクは異なるリン酸化残基の脱リン酸化に関与することを明らかにした。その成果は, ホスファターゼの基質特異性に関してアダプタータンパクが重要な役割を担うことを示したものであり, 国際的にも高く評価された。

カサマ ハルキ
笠間 春輝

大学院医薬保健学総合研究科 博士課程 医学専攻

先行研究で胎盤に特異的な分子として知られていた「Laeverin」が, 難治性である転移・再発がんにおいて, 血中循環腫瘍細胞 (CTC) や腹膜播種など転移過程のがん細胞に発現することを新たに見出した。また, Laeverinを標的とする抗体薬物複合体 (ADC) による治療効果についてマウスモデルを用いて明らかにした。その成果は, 難治性がんの新規治療の道を拓く, 学術的価値と将来性が非常に高い研究成果として国内外で高く評価された。

チョウ エンエン
張 園園

大学院医薬保健学総合研究科 博士課程 医学専攻

膀胱がんがCDK4/6阻害剤に対して示す耐性の機序をほぼ完全に解明するとともに, CDK4/6阻害剤と抗EGFR抗体薬の併用が有効であることについて, 動物モデルを使用して証明した。その成果は, 国際的にも高く評価され, 膀胱がんの治療に分子標的薬が導入される契機となり得るものである。

ハン ケイエン
範 啓琰 大学院医薬保健学総合研究科 博士課程 医学専攻

小胞体ストレス応答可視化マウスを用いて、脳外傷や脳梗塞の病態では、非神経細胞が主要な小胞体ストレス応答活性化の場であり、小胞体ストレス応答が誘導される細胞の最も多くを占めるのが血管内皮細胞であることを明らかにした。その成果は、国際的に有名な学術誌で発表され、国内外で高く評価されている。

エチゴ ヒロアキ
越後 拓亮 大学院医薬保健学総合研究科 博士課程 薬学専攻

放射性核種アスタチン-211を用いた標的 α 線治療に関する研究を行い、腫瘍への集積性と治療効果を高めた新規腫瘍指向性ペプチドを開発した。アルブミン結合部位の導入により体内動態を制御し、副作用を抑えつつ、治療効果を向上させることに成功した。さらに、免疫チェックポイント阻害薬との併用や同所性脳腫瘍モデルにおける有効性を実証した。その成果は、難治性がんに対する次世代核医学治療への応用が期待され、国内外で高く評価された。

オウ エン
王 琰 大学院医薬保健学総合研究科 博士後期課程 創薬科学専攻

越境輸送される大気マイクロプラスチック粒子に着目し、金沢大学輪島大気測定局において1年間にわたり捕集・分析を行った。その結果、冬季モンスーン卓越期にアジア大陸由来粒子を初めて確認するとともに、夏季には国内起源粒子の輸送量も無視できないことを明らかにした。この研究は、日本のバックグラウンド地域における大気マイクロプラスチックの環境挙動を示した初の報告であり、国内外で高く評価された。

ナガオカ マイ
長岡 茉唯 大学院医薬保健学総合研究科 博士後期課程 創薬科学専攻

薬物加水分解酵素AADACは、抗真菌薬ケトコナゾールを加水分解し、細胞レベルでは生成された代謝物が毒性を示す一方、マウス生体レベルでは血中ケトコナゾール濃度を低下させることで、副腎ステロイド合成に対する阻害作用を軽減し、ケトコナゾール誘導性肝障害に対して保護的に作用することを明らかにした。この研究は、薬物誘発性肝障害の機序を生体レベルで解析することの重要性を示したものであり、創薬及び医薬品安全性評価の発展に貢献する顕著な成果として、国内外で高く評価された。

バイ ホウソ
白 芄楚 大学院医薬保健学総合研究科 博士後期課程 創薬科学専攻

越境大気汚染物質の影響を高感度に捉えられる金沢大学輪島大気測定局において2016年から2021年に捕集したエアロゾル中の有機炭素(OC)及び無機炭素(EC)を分析した。冬季モンスーン卓越期に濃度上昇が認められ、アジア大陸由来の燃烧起源大気汚染の影響を初めて明らかにした。ECが急減する一方、OCは上昇傾向にあったことから、二次生成炭素質エアロゾルの環境挙動解明の重要性を提言し、国内外で高く評価された。

ヨコセキ イツキ
横関 樹 大学院医薬保健学総合研究科 博士後期課程 創薬科学専攻

三次元培養したヒト近位尿細管細胞を用い、核内受容体FXRの活性化が薬物トランスポーターOAT1及びOAT3の発現を抑制する機構を解明した。核酸アナログによる腎毒性はこれらの輸送体を介した細胞内蓄積に起因するが、FXR活性化剤により薬剤性腎障害が軽減されることを見出した。その成果は、腎トランスポーター制御機構の理解を深め、腎障害の予防・治療法開発に資する重要な知見として国内外で高く評価された。

◎芸術・スポーツ部門/Arts and Athletics Category

タニモト サユカ
谷本 沙柚佳 大学院自然科学研究科 博士前期課程 地球社会基盤学専攻

2025日本学生陸上競技個人選手権大会女子三段跳において第1位の成績を収めた。